

南米アンデスの聖なる都・クスコ 山岳地帯の自然を活かし価値ある文明を創生(その2) ー社会統治、農業生産、観光などで後世に大きく寄与ー

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

4. 観光都市化 世界遺産登録、マチュピチュ観光の基地

・植民都市の建設

インカ帝国の都・クスコは、サバ・インカのバチャクテクが建設し、1533年にスペイン人のフランシスカ・ピサロによりスペイン風の都市へと衣替えした。ピサロは、金銀財宝を差し出さただけでなく、それまであった黄金で造られ飾られた太陽神殿などを、土台・基礎類だけを残り破壊、それら金銀は溶かし延べ棒にして本国に持ち帰った。

彼らは、インカの都であるクスコをキリスト教布教の中心として整備すべく、残ったインカ伝統の石積みの土台の上に、本国以上にスペイン風の建築物を建築し都市を構築していった。こうして、かつての寺院は教会に、宮殿は聖堂に変わるなどして、コロニアル(植民地)様式でクスコの街は再建された。今日では、地場産の**インカ文明を反映した石積みの土台や壁**の上に、スペイン・**バロック風の重厚な建物**が乗り、それらが融合する形で市街が形成されている。

インカ伝統の石積みは、「剃刀の刃、一枚も通さない」といわれるように、驚くほど精緻にできている。その技術を見ると、石と石は密着面を広くとり、隣り合う石相互には段差をつけ風雨や寒気を防ぐとともに、地震時の歪に対しても最小限になるよう工夫している。このクスコの街の基壇をなす石積み、気の遠くなるような時と汗(労働)を費やし築かれた文化遺産である。

市街の中心はアルマス広場で、この広場は圧政を敷くスペイン人に対し反旗を翻らした、地元の英雄コンドルカンキが処刑された場所でもある。現在、広場に臨み大聖堂やヘスス教会が建つほか、広場の周囲をアーケードが巡っていて、お土産物店やカフェ・レストランなどが連なり、いい感じで賑わいが醸し出されている。ここから数街区西に行くとサン・フランシスコ広場がある。この辺りは落ち着いたまちで、ブティックなど上品なお店が認められる。

アルマス広場から東に行くと、アトゥンルミヨク通りという細い石畳の路地がある、この道に面する宗教芸術博物館の基壇を支える礎石の一部は、インカ時代の石積みの壁である。ここにある12角の石の意味は「年間月数」とか、「王族12人の家族を表現したもの」という説がある。広場から石畳の道を南にいくと、かつての太陽神殿の跡にサント・ドミンゴ教会が建っている。

「地方創生」支援プロジェクト





アルマス広場に面する大聖堂(左)とヘスス教会(右)



クスコ中心市街

・世界遺産登録

クスコの街は、上空から見ると、赤茶けたオレンジ色の屋根が連なっているが、街を歩くと石畳と石積みの土台、それにスペイン・バロック様式の建物とが融合する形で街並みを形成していることがわかる。クスコは、アメリカンインディアン(先住民)とメスティーソ(白人と先住民との混血)文化のつぼで、この地にはアンデス特有の素晴らしい織物があり、ペーニャ(クラブ)に行くとケーナやギターで「コンドルは飛んで行く」など、民族音楽のライブを聴くと、心が過去へと飛び哀感を共有することができる。夏になると、サマー フェスティバルも催されるし、郊外に行けば驚きに満ちた考古学の世界を楽しむこともできる。

近年、クスコのまちは、インカ帝国の都としての面影は弱まり、著名な観光地であるチチカカ湖(標高 3,890m、南米最大 8,300 km²の湖)とマチュピチュの間に位置し空港もあることから、ペルーレイルを活用した観光拠点のまち、商業都市としての性格を強めている。

そうした状況をふまえ、クスコのまちはマチュピチュ遺跡と連携し、観光都市として活性化を図るべく、まずは世界的なクレジットを得るためユネスコに働きかけ 1983 年、市街は世界遺産登録に成功する。これはコロニアル文化としてスペインから持ち込まれた、スペイン・バロック風文化が、地元の精緻な石積みの特徴とするインカ文化と融合してできた市街が、アンデスの 3360m の山岳地帯に特異な魅力を放っていることが評価されたものである。

この地は南半球にあることから、家々は北を向いて建っている。太陽が東から出て西に沈むのは北半球と同じだが、南半球では太陽は北側を回って西へと沈む。それは太陽が赤道付近を通っているからである。また、クスコの空には夜になっても北極星は見えず、その代わり南十字星が輝く。そんな違いが味わえるのも、この街に来た楽しみの一つである。

インカ文明は長い歴史の中で、異なる文化を統合・融合させる形で順次、堆積されてきた特異な文化であるが、その代表である精緻で研ぎ澄まされた石積みの技術は高く、独特な雰囲気を醸すクスコの街並み形成にも寄与しており、異国情緒に溢れ美しく魅力的な観光地となっている。

「地方創生」支援プロジェクト





石造りのアトゥンルミヨク通り



クスコ市街・街中

○空中都市「マチュピチュ」 ペルーレイル、歴史保護区

マチュピチュは、15世紀インカ帝国の遺跡で空中都市（上方からしか眺望できない。）とも呼ばれ、1911年に探検家ハイラム・ビンガムにより発見された。このマチュピチュ遺跡（区域5km²）は、ウルバンバ溪谷に沿った山の尾根にあり、この地にはペルーレイルに乗ってやってくる。この鉄道、地球上で2番目に標高の高い場所を走り、ペルー南部において観光や貨物輸送など広範囲なサービスを提供している。現在は、オリエント急行を運行するベルモンド社とペルー資本が共同で運行にあっている。

マチュピチュ観光は、通常、クスコからオリヤンタイタンボまでバスで行き、この先は道路整備が十分でないため、鉄道の旅となる。鉄道自体も時折、崖崩れにより不通となることがある。行程は1時間半程で、ビスタドーム型の列車など3種類の列車が出ている。この列車、飲食付きで地元特産のアルパカ製品などの車内販売もある。

マチュピチュ駅は標高1,800mほどの地点にあり、駅に降り立って見上げても遺跡は見えてこない。駅からはバスに乗り、約25分かけて13のヘアピンカーブを駆け上がり、ようやく標高約2,400mの断崖の上に築かれたマチュピチュ遺跡に辿り着く。ここは旅好きの人たちの憧れの地で、彼らは人生を全うするまでに一度は、この空中都市「マチュピチュ遺跡」を訪れたいと願っている。しかし、この地は道路の整備事情がよくないため、主な輸送機関であるペルーレイルの輸送量によって出入りする人の数が大きく抑えられ、事実上の入場制限となっている。

しかし、このことはマチュピチュ歴史保護区の素晴らしい自然環境を維持保全していく上で大いに役だっている。マチュピチュの観光時間は2時間、歴史保護区内にトイレはなく、食物やペットボトルも持込禁止、ごみは持ち帰りとなっている。歴史保護区に足を踏み入れると、その景色は正に写真で見たごとくで、僅かな滞在時間の間にも霧が出ては消えまた出てと刻一刻と、その姿を変えていく。リヤマやテンジクネズミなども姿を現すが、コンドルにはなかなかお目にかかれない。しかし、今にも現れそうな雰囲気漂っている。その素晴らしさは筆舌を尽くしがたいほどなので、是非一度訪れ、その目で確かめることをお勧めする。

なお、この地を訪れたとき、一つ注意しなくてはならないことがある。それは紙幣の扱いであ

「地方創生」支援プロジェクト



る、「切れたり折れたりしているものは流通しない」。そうした紙幣は、この地では無価値、ただの紙切れ同様の扱いを受けるので、気をつけよう。



クスコ近郊 ウルバンバの谷～マチュピチュ

ペルーレイル

参考資料

山本紀夫:インカの末裔たち 日本放送出版協会 1992 (※印の図も)

細谷広美:ペルーを知るための62章 (株)明石書店 2004

編集室:地球の歩き方 ペルー (株)ダイヤモンド社 2016

長谷川大:世界遺産/アメリカの世界遺産 クスコ市街/ペルー all about 旅行 <http://allabout.co.jp/>

カルメン・ベルナン、大貫良夫:インカ帝国 (株)創元社 1991

インカ帝国-世界史の窓- <http://www.y-history.net/>

掲載写真等

クスコ市街 <http://wondertrip.jp/>

インカ帝国の版図拡大 (1438年-1527年)、キープ <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

クスコ中心市街 <http://andes-nippon.com/>

リヤマとマチュピチュ <http://yumepolo.com/>

アルパカと民族衣装の女性 <http://allabout.co.jp/>

山岳部の高度さを活用した農牧業の展開 ※

クスコ近郊 ウルバンバの谷～マチュピチュ <http://www.hankyu-travel.com/>

ペルーレール <https://www.bing.com/>

「地方創生」支援プロジェクト

